

同志社よ、その名は一つの目的を意味する

ONE PURPOSE

【同志社人訪問】

株式会社ダイフク
代表取締役社長

げしろ ひろし

下代 博さんに聞く

2025 Autumn

Vol.217

巻頭企画【リーダーに訊く】

ダイハツ工業株式会社
代表取締役社長

いのうえ まさひろ

井上 雅宏さん

LEGACY

伝え遺し、生かすこと



同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

元治元年のエクソダス 封建社会からの脱出

幕末の函館基坂と、その奥に見える港
(函館市中央図書館蔵)

VISION 2025

DOSHISHA UNIVERSITY

同志社は2025年、創立150周年

#9
同志社
創立者

150年の歴史をたどる

History of DOSHISHA

海を渡り、異国の地
で学問を修め、

帰国後、教育に情熱を注いだ新島襄。彼の描いた理想と不屈の精神は、150年という歳月を経てもなお、同志社の魂として脈々と受け継がれています。「150年の歴史をたどる」最終回は、同志社創立者・新島襄の志に迫り、同志社の原点を見つめます。



◀ CHECK
左記コードにて
特別ムービーを
視聴いただけます。



INDEX

- 02 150年の歴史をたどる #9 同志社創立者
- 04 巻頭企画「リーダーに訊く」 ダイハツ工業株式会社
代表取締役社長 井上 雅宏さん
- 08 研究の最前線 経済学部 経済学科 原田 禎夫准教授
- 10 DOSHISHA DNA 株式会社PITTAN
取締役COO 西川 嘉紀さん
- 12 突破する学生たち DERCロケットサークル
- 14 今年度就職活動をした先輩からのメッセージ
- 15 来年度就職を目指す皆さんへ
- 16 同志社校友会
- 17 クリスマス・イルミネーション点灯式／第150回 同志社EVE
- 18 ゼミで学ぶ 魅力を語る
- 20 2025年度卒業式・学位授与式(学部・大学院)／
2026年度入学式(学部・大学院)／本学教員の執筆図書紹介
- 21 同志社人訪問 株式会社ダイフク
代表取締役社長 下代 博さん
- 24 My Purpose 挑戦する人 梶本 一花さん(スポーツ健康科学部4年次生)

お知らせ

「ONE PURPOSE」は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションを図ることを目的として発行しています。同志社大学の最新情報は随時ホームページでお知らせしております。ぜひご覧ください。
▶ <https://www.doshisha.ac.jp/>

卒業生の住所変更、発送停止を希望される場合の連絡先は以下にお願いします。
校友課 TEL: 075-251-3009 MAIL: ji-koyu@mail.doshisha.ac.jp



1870年、アーモスト
大学に在学中、級友
の求めに応じて再現
した脱国時の扮装
(同志社社史資料セ
ンター所蔵)

密出国の1か月前、裏は眼病を患い、ロシア政府が函館に建てた病院を受診しています。1854年に下田とともに開港した函館は、1859年には横浜、長崎とともに貿易を開始。北の港、函館にはとりわけロシアをはじめとした外国人居留地が開かれていました。裏が残した手記『函館紀行』によれば、ロシアの病院は設備が整い、食事は煎った

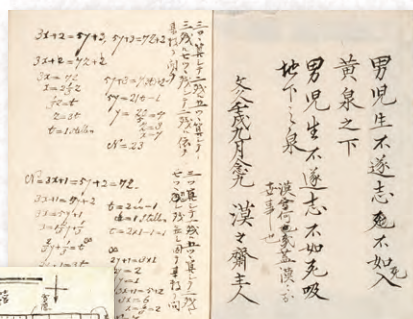
元治元年(1864年)、21歳の新島裏は函館にいました。函館で外国人から直接学ぶ機会があることを知っていた裏は同年3月、すぐさま上州安中藩に申請を出し、わずか数日のうちに藩主から正式な許可を取り付けることに成功。しかも、1年間の遊学費用まで給付されることになったのです。にもかかわらず、その年の6月には密出国の挙に出ます。当時は、キリスト教が禁じられ、海外渡航も厳しく制限されており、密出国は大罪でした。それは命を懸けた決断でした。故郷の家族や藩の上司などにも責任が及ぶ恐れがあることを覚悟のうえで、海を越えました。命を懸けてまで、裏を海外へと駆り立てたものとは何だったのでしょうか。



1954年、函館に建てられた「新島裏海外渡航乗船之处」碑
『新島裏—その時代と生涯』P.28より転載

牛肉や牛肉を細かく叩いて丸め豚の油で揚げたものに、鶏卵スープ。カルテを取り、患者の病状は細かくチェック。薬は順次投与され、しかも治療は身分貧富の差別なく、すべて無料でした。「ヒポクラテスの誓い」を知る西洋の医師には当然のことだったのかもしれませんが、裏には大きなカールチャイシヨックでした。「予切に嘆ず、函館の人民多年魯の患救を得ば、我が政府を背にし却て汲々として魯人を仰かん事を」と嘆息しています。明治維新の前ですから、「我が政府」と言っているのは、当時、函館を統治していた箱館奉行所、そしてその上に君臨する徳川幕府のこと。南下政策を進め、進出先の民心掌握にも余念のないロシアに比べ、日本政府はあまりにも無関心ではないか、と歯ぎしりをしているようです。こうして裏は、息苦しい封建社会の束縛から脱し、まだ見ぬ世界へ旅立つことになるのです。

手記『函館紀行』の一部。ロシア病院の見取り図が描かれている
(同志社社史資料センター所蔵)



新島の代数学のノート。
若かりし裏の心情と不屈の思いを、漢詩で書き付けている
(同志社社史資料センター所蔵)

死入黄泉之下(「男児生まれて志を遂げざるは、黄泉の下に入り死ぬに如かず」。十代の裏の心の内には、本人にもまだよくわからない、不定形のエネルギーが渦巻いていたのでしょう。その志は、そして、その熱量は、生涯にわたって貫かれました。

常識にとらわれない発想と、未知の世界への強い好奇心、型破りな精神……。封建制度下の日本社会の桎梏を脱し、広く世界に学ぼうとする裏の志は、当時の函館の状況から強く刺激を受けました。裏が敢行したエクソダス、自らの志を貫いた、決死の旅立ち。その先に、同志社の今があります。※本文では、歴史的経緯に応じて「函館」と「箱館」を使い分けています。



Seeds of Legacy

次代へ託す、希望の種。

半年間にわたり、「いのち」をテーマに開催された大阪・関西万博が閉幕し、今は万博で得られた気づきや成果を、いかに「レガシー」として未来へつないでいくかが議論されています。長い伝統を誇る京都の地で生まれ、今年創立150周年を迎えた本学にとっても、培ってきたレガシーの継承は、大事なミッションです。今号では万博に限らず、様々な課題に日々向き合い、次の成長へと生かす努力を続けている本学教員や学生、校友を特集しました。

ダイハツ工業株式会社 代表取締役社長

いのうえ まさひろ
井上 雅宏さん

1987年、同志社大学経済学部を卒業し、同年、トヨタ自動車に入社。入社当時から海外勤務を希望し、カナダのほか、中南米へ3回赴任。『海外』とひとくくりせず、個別の国の人々のことを知ることが大事』との信念を持つ。新興国での事業構造改革に取り組み、2019年、中南米本部長に就任。2024年から現職。高校時代はサッカー部に所属。『今でもサッカーやフットサルなど“緩くない”スポーツが好きです。最近はおっぱらテレビ観戦ですが』

人に寄り添い、
暮らしを豊かにする
ものづくりを目指して

日本で1年間に販売される新車台数のうち、約4割を占める軽自動車。1世帯あたりの普及率は近年、50%を超え、日本の国土、道に合ったサイズ感で自家用、商業用にと幅広く愛用されている。中でもダイハツ工業は、「ムーヴ」「ハイゼット」を筆頭に幅広いラインナップで人々の暮らしを支え、軽の新車販売台数で長らく国内シェアトップを走ってきた。

2024年3月、親会社のトヨタ自動車からダイハツの新社長に就任した井上さんは、「ダイハツの強みは、『お客様に寄り添い、暮らしを豊かにする』という理念の下で良品廉価なものをつくり出せる情熱と技術。関西に根ざした『ものづくり』の力をさらに磨き、日本や世界の他の国々でも喜ばれる商品を提供し続けたい」と語る。

小さな車に込めた卓越した技術

トヨタ時代は4回の海外駐在を経験し、在職した36年のうち約半分を海外、主に中南米の新興国で過ごしてきた井上さん。ダイハツへの社長就任は、同社の認証不正問題に絡んだものだった。ただ、ダイハツとは直近の5年間、ともに仕事をしており、その技術力に、敬意と厚い信頼感を抱いていたという。



「トヨタグループは世界で約1000万台の製造販売をしています。その2割ぐらいがダイハツ工業の関わる車です。北米ではトヨタの『タンドラ』『ハイランダー』のような大型SUV車が人気ですが、モータリゼーションがまだ進んでいないASEAN諸国や中南米、アフリカのような新興国では、小さめで廉価な車の方が受ける。まさにダイハツが設計開発するような良品廉価の小さな車が、エントリーカーとして最適なんです」

技術力だけでなく、安全設計思想にも目を見張るものがあると井上さんは言う。その筆頭が、衝突回避支援システム「スマートアシスト」を開発し、最初に軽自動車に導入した点だ。このシステムは、前方の車に衝突しそうな時にブレーキをかける、ブレーキとアクセルを踏み間違えても急発進しないなど、ドライバーの判断を補助することで事故被害や運転負荷の軽減を目的としているものだ。

「通常、こうした機能を搭載しようとなると販売価格は20万〜30万円ほどになってしまいます。しかしダイハツは、低速域が主体の軽に相応しい仕様を追求し、不要なものをそぎ落とすことで、販売価格を5万円ほどに抑えて搭載しました。だから軽自動車ユーザーに普及させることができたんです。高級車にそれをつけても、購入できる人は限られていますからね。軽自動車は、お子さんを乗せてお母さんが運転されるなど、忙しい中で運転されるケースも多く、その点でもスマートアシストの普及は必須です。日本以外の国々でも同じような状況は起きていますので、強みをさらに磨けば、様々な国で商品展開をしていけるだろうと考えています」

ダイハツに着任して以来、車両工場や部品工場、さらには部品を仕入れる関西の企業群を訪問してきた。その中で再発見した、日本のものづくりを支えてきた町工場の、関西ならではの強みを頼もしく感じている。

今必要とされる ものづくりに挑む

ダイハツは1907年、「発動機製造株式会社」として大阪で創業し、出力6馬力の国産第1号の吸入ガス発動機を世に出した。車として最初に出したのは1930年の三輪自動車「ダイハツ号」で、戦後には軽三輪トラックの「ミゼット」が大ヒット。1970年の大阪万博では、来場者の移動や警備・運搬用の電気自動車を275台提供した。今回の大阪・関西万博でも、来場者の「足」として電動パーソナルモビリティを150台提供。7月末までに約2万人に利用され好評を博した。そして、8月末、「eスニーカー」の名称で一般向け販売を開始した。

eスニーカーは、最高時速は6kmと、道路交通法では歩行者扱いとなる。バッテリーは取り外して自宅で充電でき、満充電で12kmの距離を連続走行可能。大きめの空気タイヤで乗り心地が良く、段差も楽に乗り越えられるという。街中になじみやすいスタイリッシュなデザインで、自転車や歩行者とほぼ同じ目線で運転できるのが特長だ。主にシニア層をはじめ幅広いユーザーをターゲットに、年間5000台の販売目標を掲げる。

実は井上さん、「eスニーカー」プロジェクトを開いた当初は、「商売になるのかな」と心配になったという。

「例えば、主力の『ムーヴ』や、『ハイゼット』などは年間10万台程度売れています。対して『eスニーカー』は、サイズが小さいので原価は安いとはいえ、



大径タイヤを採用し、少々の段差は楽に乗り越えるeスニーカー。
安全と楽しさを追求、「乗った瞬間、いいな、と思いますよ」

台数が1、2桁少ない。商売にならないと思ったのが第一印象です」

なぜ「eスニーカー」なのか。開発チームと議論する中で、伝わってきたのは情熱、ストーリーだったと井上さんは振り返る。

「高齢化社会、地域の過疎化に向けて、社会にソリューションを提供するという『高い目線』からの提案ではないんです。鉄道やバスの減便に免許返納など、困ってる人がいる

から、これくらいなあかんのちゃうか。そんな感じなんです。『お客様に寄り添い、暮らしを豊かにする』という理念そのままの発想ですね(笑)」

万博開幕前に試乗し、乗り心地の良さを実感した。「乗車位置が高めなので、ついでてくれた社員を見上げるのではなく、同じ目線で話せるのがいいですね。ダイハツは『小さな車をつくる』会社だと思っていましたが、『必要なものをつくる』会社なんだと改めて実感しました。企業として投資、回収、採算をとるという観点でいくと、やめておこうとなるアイデアでも、『いっぱんやってみようか』となるカルチャーは強い。そういうDNAがずっと受け継がれてきた会社なんだと感じました」

「eスニーカー」については、万博会場で実際に乗車した来場者たちが好意的なコメントを発信。ダイハツの新しいモビリティだということが自然と広まっていき、社内は盛り上がったそうだ。「当社はグループ会社を含めると日本に約4・7万人の従業員がいるのですが、これまであまり横の連携ができていませんでした。社長就任以来、この4・7万人の絆をもっと強くしていきたいと、デジタル社内報を発行し、様々な部署の活動を紹介しています。この活動をさらに広げていく上で、『eスニーカー』は大きなきっかけになりました」



京都にある強みを生かし、さらなる発展を

井上さんは京都で生まれ育ち、保育園から高校まで、ほとんど近所の顔なじみと過ごしてきたそう。大学に入り、初めて近所以外の人たちと出会ったものだから、なかなか輪の中に入れず苦労しました」と笑う。だが、部活やサークルに参加するもしないも自由。学生の自主性を尊重するという大学の雰囲気のおかげで、経済学部でゼミ生活を謳歌。アメリカ留学から帰国したばかりの教授のもとでミクロ経済学や税制、ゲーム理論など幅広く学び、世界に目を向けていった。

トヨタ時代は海外と関東圏の往復ばかりだったが、ダイハツへの着任で、久しぶりに関西に戻ってきた。「歴史があるだ

けに、大学も企業も長く続いているところが関西には多くあるんだと初めて気づきました。それだけに、もっと何かできるだろう、ポテンシャルは高いのになと思うこともよくあります。万博開催とそのレガシーというのも一つの要素でありますが、関西の人と歴史、大学の学術的なパワー、農業など、生かし切れていないようで、もったいないと感じるんです」

特に1000年以上の歴史と伝統を誇り、100年企業も多い京都、そこに立つ母校への期待は大きい。「創立150周年を機に、もう一度建学の精神、原点に返り、同志社ならではの強みを生かしたアクションを取ってほしい。それが同志社をさらに長くつないでいくことになり、関西への貢献にもなると思います」

その上で学生たちには、情熱を胸に前進してほしいとエールを送る。

「新島襄は、北海道の五稜郭で新政府と旧幕府派の最後の戦いが行われていた時代、全く別の意思で日本を飛び出していた。今以上に危険

で決死の覚悟だったと思いますが、信念と情熱を持って飛び出したわけです。そういう精神は同志社大学のどこに残っているはず。チャンスは降ってこないし、誰も献上してくれない。学生の皆さんには、自分自身でチャンスをつかみにいく気構えと情熱を持続してほしいと思います」



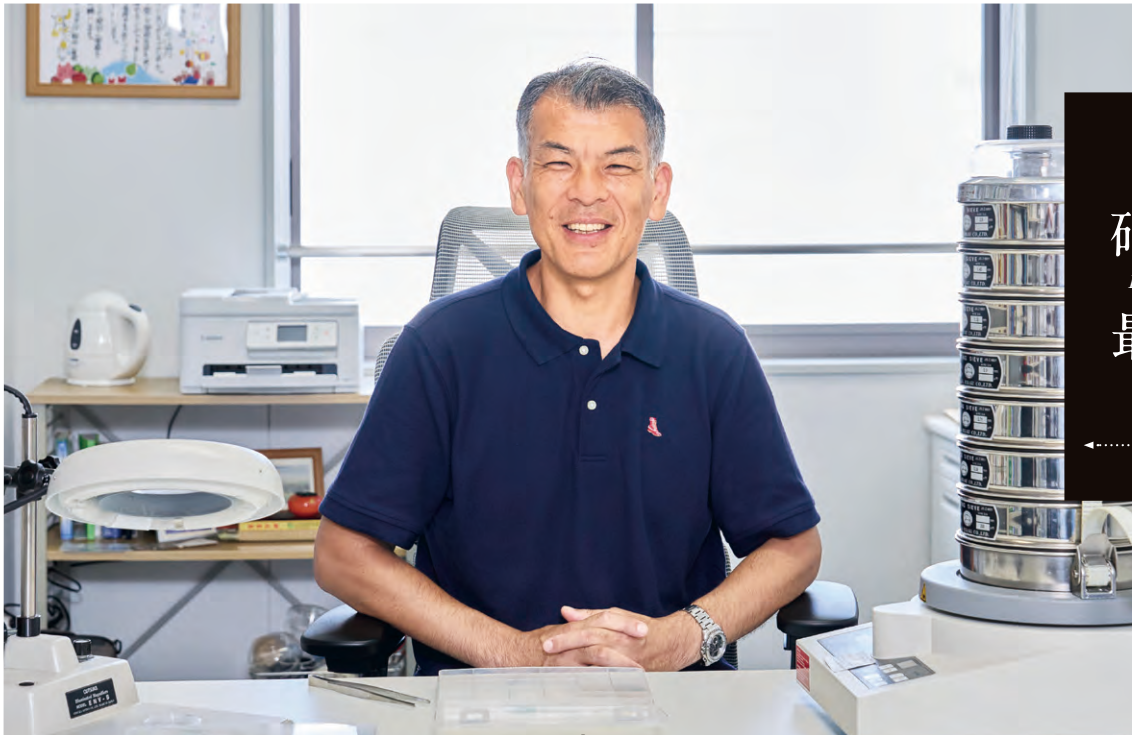
自動車史料展示館で、軽自動車の進化の歴史や車の仕組みを楽しく学べる「ヒューモビリティワールド」。小学校の社会科見学をはじめ、広く公開している



ダイハツが「クルマの楽しさ」を届けるために生んだ軽オープンスポーツカー「コペン」。屋根を開ければ、大空と一体になる開放感が広がる



日本の高度経済成長期に一大ブームを巻き起こした軽三輪トラック「ミゼット」。小回りが利き、レトロな雰囲気、今もファンは多い



研究の
Forefront of research
最前線

経済学的視点でプラスチックは減らせる 市民参加で循環型社会の実現を

はらだ さだお
経済学部 経済学科 原田 禎夫 准教授

京都府亀岡市生まれ。1998年、同志社大学経済学部卒。2005年、同志社大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学、博士（経済学）。大阪商業大学公共学部准教授を経て、23年から現職。同志社女子大学現代社会学部嘱託講師。専門は公共経済学（環境政策・地域政策）で、保津川（環境保全）に取り組むNPO法人「プロジェクト保津川」代表理事。活動を通じ、地域ごとの歴史や文化の継承にも取り組む。趣味はスキーや登山などアウトドア全般。

リサイクルの前に リデュースを

小型で持ち歩きやすいペットボトル飲料の発売や、コンビニエンスストアの普及に伴い、1990年代後半からプラスチック（以下、プラごみ）の増加が目立つようになってきた。分別収集や街中の回収ボックス設置、レジ袋の有料化など、対策は少しずつ進んできているものの、大学教員とNPO法人代表という一足の草鞋でプラスチック汚染の解決に取り組む原田禎夫准教授の目には、まだまだ道半ばに映っている。

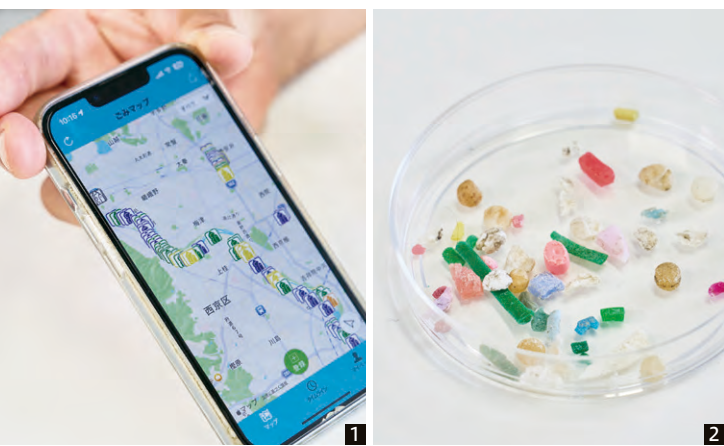
「国内のペットボトル回収率は約90%ですが、年間で280億本も販売されているので、未回収分が残り10%としてもかなりの量になります。また、ボックスからはみ出したものが豪雨などで環境中に流出する量は、少なく見積もって年間0.2%。500mmのペットボトルに換算すると、那覇から稚内を越えるほどの量になるんです」

地元である京都・亀岡市を流れる保津川に、廃棄されたペットボトルやレジ袋、コンビニ弁当の容器などが大量に流れ着いている実態を知ったことが、プラスチック問題に取り組むようになったきっかけだ。リサイクル以前にリデュース、ごみの発生そのものを抑制しようと、経済学的視点からアプローチする。「日本ではレジ袋の有料化で、マイバッグを持参する人が増えました。また、ヨーロッパやアメリカの一部の州では、飲み終えたペットボトルを店に返すと容器代が戻るデポジット制で効果を上げています。ごみの発生を抑制する手段は一つではありません。様々な方法を織り交ぜて効果的な策を考え、自治体へ提言するなどしています」

データで見える化 ごみ問題を自分事に

プラごみ問題に取り組み出した当初は、そもそもごみに関するデータがなく、どこに、どれだけごみが落ちているか、記録をとることから始めなければならなかった。「ただ、研究者や行政職員だけでデータを集めても、市民からすれば『ご苦労さん』で終わりです。そこでNPOのメンバーとスマートフォン向けアプリ『ごみマップ』を開発し、町内会のみさんと一緒に川べりを歩いてデータを集め、マップに落とし込んでいきました」

「市民科学」と呼ばれるこうした手法は、天気予報の精度向上に活用されるなど、近年注目されている。データの蓄積で原因と対策を考えられるようになるだけでなく、他人事だった川のごみが、そこに暮らす自分たちの課題として捉えられるようになることも大きいという。



- ①ごみの“見える化”を目的に開発したアプリ「ごみマップ」。どこに、どれだけごみがあるか、登録者から日々データが寄せられる
- ②海岸や河原の砂には、マイクロプラスチックも多く混じっている。緑色のものは人工芝、赤色のものはコーン標識の破片だ



万博会場で行ったワークショップの様子。
若狭湾に流れ着いたペットボトルのほとんどは国内から流出したものだ

「意図せず流出させてしまうものも少なくないことがプラごみの問題です。人工芝やコーン標識、田畑で使われるプラスチック被覆肥料は、劣化すると細かなマイクロプラスチックとなり、陸から川へ、そして海に流れ出て汚染の一因となります。『自分はポイ捨てしないから関係ない』ではないということ、一人でも多くの人に知ってほしいですね」

大阪・関西万博は「ごみゼロ」を発信する好機で、開幕前から「資源循環ワーキンググループ」に加わり、レジ袋配布の原則禁止、マイボトル持参を促す給水器と洗浄機の設置、リユース食器の導入、生ごみ・食品廃棄物の回収・堆肥化に取り組んだ。また、開催期間中にはゼミ生とともに、ワークショップを開いて親子連れらにプラごみ問題が「みんなの問題」であることを伝えた。

「世界的には生ごみは堆肥化が基本ですが、日本は廃棄物の8割を焼却処理し、リサイクル率は約20%とOECD（経済協力開発機構）加盟国38ヶ国中32位（2020年）です。水分量の多い生ごみを焼却するために、大量の化石燃料を投入していることも課題です。ごみと思っていたものは、まだまだ資源として循環できることに万博を通じて人々が気づいてくだされば、それは大切なレガシーになると思います」

社会を一步リードする大学へ

「万博では学んだ知識を子どもにも分かりやすく説明する機会をいただき、学生たちも成長できたと思います。講義ではいつも眠そうにしている学生が、英語や中国語で海外からのお客さんに説明するなど、私も学生の新たな一面を見ることができました」とほほ笑む。「学生たちにはこれからもどんどん外へ出て、いろんな人との交流を通じ、たくさんの刺激を受けてほしいと思っています」

活動をしていく中で、同志社大学が社会で「目」を置かれ、学生たちが地域の人から大事に思われていることを実感する機会は多いそうだ。だからこそ、期待に応えられる大学にと、原田准教授は力を込める。「社会をより良く変えるため、大学から変わっていくことも一つの方法です。アメリカのマイボトル対応の自動販売機は、大学で実証実験を行った後に社会に出たものです。本学も企業と組んで環境配慮型の製品サービスを作ることができるといいかもしれません。期待されているからこそ、常に社会を一步リードしていけるように、我々も頑張らないといけませんね」





DOSHISHA DNA

【ビジネスパーソン】



Nutrifull

汗一滴から見るヘルスケア 予防医療で社会を変える

汗、それもほんのわずかな量から、人の健康状態を読み解く。この革新的な技術をもとに、肌や筋肉のコンディションを可視化するサービスを提供しているスタートアップで、西川嘉紀さんは事業展開を担っている。現在、美容やフィットネス分野で新たな価値を生み出しているこの技術は、私たちの未来にどのような変化をもたらすのだろうか。

株式会社PITTAN
取締役COO

にしかわ よしのり
西川 嘉紀さん

2012年に同志社大学文学部を卒業後、京セラ株式会社に入社。16年まで在籍し、その後マツダ株式会社へ転職。東南アジアを中心にマーケティングやセールス、子会社管理を担当。20年に神戸市に入庁し、スタートアップ支援に従事。官民連携ファンドのスキーム作りや、海外のスタートアップと神戸市内の事業者との共創に関わる中で、22年創業の「PITTAN」と出会う。自身も事業に携わりたいとの思いから、24年より現職。

ラボを出て分析する小さなマシン

バスケットボールでも持ち上げるみたいに、西川さんは18cm四方の小さなマシンをひよいと掲げてみせた。「付属のキットでごく微量の汗を採取します。その中に含まれるアミノ酸を、この卓上型マシンで分析し、10分ほどで肌や筋肉の健康状態をデータで示します」と説明する。手順は簡単だ。まずキットからパッチを取り出し、水を一滴垂らして顎の下に貼り付ける。3分待てば汗が集まり、採取完了。パッチをマシンにセットすると自動的に抽出と解析が始まる。

この仕組みを支えるのが、PITTANが開発した独自の小型分析マシンだ。従来、体液の定量分析は大型の装置を備えた研究機関でしかできなかった。しかし、このマシンなら場所を選ばず、誰でも手軽に行える。美容業界では肌コンディションの新しい指標となり、フィットネスジムでは「筋肉のつきやすさ」や「脂肪のつきにくさ」、「栄養の吸収効率」などの見える化を実現。汗を通じて自分の身体を知る体験は新鮮で、つい人に話したくなる。

大阪・関西万博では4度にわたり展示を行った。その場で汗を解析する様子に、来場者は驚きと楽しさを感じ、「どこで体験できるのか？」との声が相次いだという。まだプロトタイプで体験できる場は限られるが、確かなニーズを実感できた。研究室に閉じ込められていた技術を、誰もが使える日常のサービスへ——。その挑戦は、今まさに始まったばかりだ。

予防医療で健康寿命を延ばす

同社が取り組む次のステップは、同じマシンでアミノ酸だけでなくタンパク質やホルモンを分析すること。「炎症

PITTANが開発した小型分析マシン「Pitagoras(ピタゴラス)」。
PITTANのPITと、人体の調和を
提唱したピタゴラスが名前の由来



物質を検出すれば細胞の状態がわかり、生活習慣病リスクや老化レベルを推定できます」と西川さんは語る。今回の大阪・関西万博でも、ヘルスケアパビリオンは連日多くの来場者で賑わった。「ヘルスケアはこの万博にとって大きなテーマでした。医療系やバイオ企業が集積する関西ならではの強みも大きかった」と振り返る。同社もそのエコシステムの一角を担っている。その上で西川さんは、「西洋医学による治療だけでは限界がある」と考える。病気になる前から分析を始める現状では、医療費や社会保障費は増大する一方だ。重要なのは、健康寿命をいかに延ばすか。そのためには自分の状態を知るといふ、最初の一步が足りていないと指摘する。高精度でありながら身近で気軽に使えるこのマシンは、その課題を解決する手段の一つになるだろう。

学生時代に戻れるなら起業したい

技術面で分析項目の拡張を進める一方、ビジネス面を担う西川さんが力を入れているのが海外展開だ。「医療保険制度が整っていない国ほど、予防医療の必要性は高い」と語り、これまでのキャリアで培った経験を生かし、まずは東南アジアを中心に事業進出を計画している。

西川さんが海外志向を持つようになったのは、パイロットの夢を断念したことがきっかけだという。同志社大学時代は、バスケットボールサークルに打ち込み、スウェーデンへ留学するなど、勉強よりも課外活動に注力。その経験が今の自分の財産になっていると話す。

一つ目の財産は、仲間。「サークルの友人とは先日東京で集まりました。各業界で活躍している姿を見ると、自分も負けていけないと励みになります」。また、スウェーデン留



皮膚から蒸散するごく微量の汗を採取したパッチをセットすると、自動的に解析が始まる

う。現在はエステやジム向けに提供されているが、将来はコンビニや薬局といった生活動線に配置し、誰もが利用できるようにしたいという。

「Lifelong Positivity」。病気になる前の生活習慣をどう変えるか。予防医療が進めば医療費負担も軽減され、社会そのものが変わるはず。関西からヘルスケアサービスを作るのは、我々の使命だと強く感じます」

学で出会った香港をはじめとする外国人の友達とも交流が続いており、「いつも刺激をもらいます。今度の東南アジア出張で再会できるのが楽しみです」と笑顔を見せる。

二つ目は、答えのない問いに向き合う姿勢だ。「確定的な答えがないこと、曖昧なことに直面すると、不安を感じます。けれど私は、そうした不確定な世界を楽しめるようになりました」

そんな西川さんは、「もし学生時代に戻れるなら起業したい」と話す。「学生にはリスクがありません。失敗しても失うものはない。挑戦には絶対のタイミングです。社会に出れば、答えのないことばかり。だからこそ、学生の間に曖昧さや不確実なものを受け入れる力を養ってほしいですね」と後輩たちにエールを送った。



打ち上げは、一瞬。 でも、それはきっと 一生の思い出



デルク DERCロケットサークルとは

小型ロケットの開発や製作に取り組む同志社大学の学生団体。指導者やスポンサーはおらず、手弁当で開発を続けているが、液体と固体燃料を組み合わせたハイブリッドロケットの打ち上げに成功するなど成果を上げている。身につけた知識や技術を用いて継続的に学生イベントや大会に出場。毎年3月に開催される「種子島ロケットコンテスト」優勝を目標に掲げる。

京田辺キャンパスを中心に活動している「DERC(デルク)ロケットサークル」。研究を重ねた技術と高度な設備、時には身近な素材を使って製作したロケットが一条の白煙とともに青空に駆け上がるミッションを果たす姿は感動的だ。好奇心旺盛で多彩なメンバーが目指すは、「同志社から宇宙へ!!」。会長の村田健翔さんに活動について聞くと、ロケットにかける熱い思いが返ってきた。



理工学部3年次生
ひがした ふみや
東田 文陽さん

理工学部3年次生
むらた けんた
村田 健翔さん

理工学部3年次生
ひぐち まな
樋口 真菜さん

会長になる前は、2年次生に木津川河川敷で一番小さなA型モデルロケットを打ち上げる新入生歓迎会のPM(プロジェクトマネジャー)を務めた。「ほんまに趣味がないので、夏休みもほぼデルクの活動でした。宇宙に興味はありますが、ガンダムははまらなかったです」

from Doshisha to Space

創設7年を迎えた ロケットサークル

「DERCロケットサークル」は、同志社大学に宇宙系の学科がないので、自分たちでロケットをつくろうと2018年9月に設立されたサークルです。火薬を推進力とする全長30cm程度のモデルロケットから始まり、今は1.2mで、固体燃料と液体酸化剤の2種を使用するハイブリッドロケットも研究・製作しています。

モデルロケットでは、毎年3月に鹿児島県の種子島で行われるコンテストに参加しています。24年は第20回大会記念賞を受賞、インテリジェント部門で優勝しました。その2か月後の5月には、和歌山県・加太で、ハイブリッドロケット「Orcinus Orca」(オルキヌス・オルカ)の打ち上げに初めて成功しました。最初の挑戦では失敗していたので、打ち上がった瞬間は、爽快感というか達成感がありました。

最適解は ポテトチップスの筒

メンバーは今、25人です。理工学部、文芸情報学部、生命医科学部などのほか、文系出身者もいます。「構造班」と「電装班」に分かれていて、構造班はパソコンのCADソフトを使って設計し、3Dプリンターでパーツをつくり出します。電装班はプログラミングや電気系統の設計、製作などを行います。

ワイワイガヤガヤと自由にアイデアを出し合いながら、作業をしています。モデルロケットのボディは紙製ですが、ポテトチップスの筒を流用しているんです。電子基板で重くなりがちなので、少しでも軽量化を図るために僕らがたどり着いた最適解が、ポテトチップスの筒なんです。だから、大会前にはやたら食べますね。

カメラサークルと兼サーしている人もいて、You Tubeやインスタグラム



ハイブリッドロケットの打ち上げ直前。技術と情熱は全てこの瞬間のために注ぎ込む

に上げる写真や動画を撮ってくれます。きれいで、迫力ある表現ができてるのは、こうしたカメラ好きのメンバーがいてくれるからです。キャッチコピーの「打ち上げは、一瞬。でも、それはきっと一生の思い出」は文系のメンバーが考えてくれました。めっちゃいいですね。

「いいしかない」

僕自身は小さい頃から宇宙が好きで、家族との旅行先で星空を見上げたり、宇宙航空研究開発機構(JAXA)の見学に連れて行ってもらったりしていました。

僕は、まだ海外に行ったことがないんですけど、宇宙って、それとは比べものにならないくらい広いじゃないですか。これを解明していくことにロマンを感じます。遠い先かもしれないですが、宇宙エレベーターだったり、移住であったり、そうしたことに携わりたいです。

23年に入学した時の新歓のパンフレットでこのサークルを見つけて、学業+αだと思って入会しました。「ガクチカ」っていう言葉がありますが、学業以外で将来につながればと、「こしかない」って感じでした。入ってみると、優秀な先輩ばかりで、すごいって思いました。それから活動を続けていき、今年会長になったんです。今ではDERCロケットサークル一筋です。

「少し上」が発展に

今はみんなを引っ張る立場なので、サークルの維持、今後の発展を考えています。課題は活動スペースや資金難など、いくつもあります。ロケットの製作・打ち上げには多くの費用がかかり、大学側にもかなりの協力をいただいていますし、それでも足りない場合はメンバーのアルバイト代で捻出することもあります。クラウドファンディングも実施しており、私たちの活動を多くの人に知っていただき、広くご支援いただけるとありがたいです。

一方でロケット製作の技術的な発展は、積み重ねと継承だと思います。夢を見て、大きな目標を掲げることも大事ですが、簡単にはいきません。僕らがつくったものの少し上を目指してもらうことが技術の発展、継承につながると思うので、「今僕らにできるのはここまで。後はこういう問題が残っているよ」というようなことを後輩たちに伝えていきたいです。

サークル一筋と言いましたが、学部の勉強も頑張っています。普段の授業では製図や物理実験などの授業や、決められた予算で設計からものづくりまでを行う課題に取り組んでいます。図面を描いたり、加工をしたりというのは、入学前にはできなかったことなので、恵まれた環境の中で、充実した生活を送れていることに、感謝しています。



\\ 今年度就職活動をした先輩からのメッセージ //

(「2025年度 就職活動に関するアンケート」から)

文学部

福利厚生や給与なども重要ですが、事業の内容に対して、自然体で取り組めるかどうかを判断基準にされるのが良いと思います。

文学部

私はキャリアセンターでの個別相談でよく面接練習をさせてもらったため、本番でも自信を持って受け答えをすることができました。皆さんもぜひ活用してみてください。

社会学部

公務員はインターンも少なく、働くイメージが湧きにくいかもしれません。希望自治体以外も広い視野で、インターンなどに参加しておくことをおすすめします!

社会学部

自分を過小評価すると可能性を狭めてしまいます。

法学部

周りと比べずに活動続けましょう! 自分の道は自分にしか決めることができないので!

法学部

就職活動は情報とやる気が大事です! 自分のモチベーションを保ちながら常に情報収集をしましょう。

法学部

やった分だけ返ってくるのが就活だと思う。

経済学部

まずは合同説明会に行って興味のない業界もたくさん見て比べるべし!

商学部

大学生生活を全力で楽しみ、自分はどのような人物なのかを話せるような経験、生活を積み重ねることが大切です!

商学部

対策は計画的に行うこと、ESも面接も1人でやらず、複数人から意見を貰いながら進めることが、大切です!

政策学部

やみくもにエントリーするのではなく、とにかく早い時期から自己分析をしっかり行い、自分に合った業界、職種、企業にエントリーするのが近道だと実感しました!

政策学部

偏らないありのままの姿で選考を進んでいくと、企業側と学生側のどちら側も納得がいく結果が得られると思います。ストレスの多い時期だと思いますが、悔いが残らないようにやれることは全てやってもらいたいと思います。頑張ってください!

文化情報学部

ガクチカを作りたいなら、サークルやバイトなどで何かやるのが一番簡単。就職に強くこだわらず、やりたいことをやっていくこと。企業が評価するのはそういった行動なので、就活を意識せずにはまずとにかく学生生活を楽しむ。

スポーツ健康科学部

色々なインターンシップに参加して、自分が興味を持てる企業を知ることが大事だと思う。新聞を読んだりすることで社会の企業に対する関心を深めて、自分がやってみたいことは何かということに早めに始めてほしい。また、ESも何回も添削してもらってどこでも使えるようにしておくことや、面接も自分が本当にしたいことを深掘りしておくことで意図していなかった質問にも対応できると思う。

グローバル地域文化学部

遠慮することなく、周りの人を頼ってください。積極的に自分から情報を得てください。

グローバル地域文化学部

自己分析と企業分析は2軸で必須です。面接で自信をもって答えられるよう、頑張ってください。

生命医科学研究科

色々な会社があるのでしっかり調べて、少しでも興味を持てるところには何かアクションをとると良いと思います。

今後開催する主な支援プログラム

こちらに掲載していないプログラムもあります。詳細は、キャリアセンターホームページ、キャリア支援システム「e-career」、キャリアセンター掲示板、同志社大学ポータルを随時確認してください。

プログラム名	開催時期
エントリーシートワークショップ	毎月複数回開催
面接ワークショップ	毎月複数回開催
グループディスカッションワークショップ	毎月複数回開催
学内企業説明会	2026年2月16日~26日
内定者座談会	10月~12月
公務員・公立学校教員業務説明会	11月~12月

キャリアセンター
ホームページ



[e-career]



過去に開催したセミナー・ガイダンスの動画配信画面

※動画配信を行っていないセミナーもあります。



個別相談について(対面・Web・電話)

キャリアセンターでは、経験豊かなキャリアアドバイザーやキャリアセンタースタッフが、進路や就職活動に関する悩みや疑問等の相談に対応します。相談方法は、対面・Web・電話から選択できます。相談を希望の場合は、「e-career」から予約してください。

【来年度就職を目指す皆さんへ】

納得のいく就職に向けて

来年度の就職を目指す皆さんが気になるのは、現在の社会情勢や経済動向が自分たちの就職活動にどう影響するのかだと思います。この点については、悲観しすぎる必要はありません。現在では、企業の採用意欲は回復傾向にあり、有効求人倍率は高水準を維持しています。日本国内では労働人口の減少により、企業は新卒の人材確保が難しくなっており、企業の採用活動の早期化・長期化、手法の多様化が進んでいます。

コロナ禍を経て就職活動を取り巻く環境が大きく変化する中で、大切なことは、「早めの準備と幅広い視点を持つ」「あきらめず粘り強く取り組む」「自分で考えて決める」の3点です。

キャリアセンターでは、様々な就職支援プログラムや個別相談で皆さんの就職活動をサポートしていきます。就職活動は情報戦です。キャリアセンターを積極的に活用しましょう。次に、本学の現4年次生・大学院2年次生の就職活動の状況と、キャリアセンターが実施する現3年次生・大学院1年次生向けの就職活動支援について説明します。

現4年次生・大学院2年次生の状況について

現4年次生・大学院2年次生である2026年4月採用の就職活動は、前年と同様に、企業の採用活動のうち、広報活動が「3年次生の3月」から、選考活動が「4年次生の6月」から開始のスケジュールとなりましたが、この日程によらない企業も多数あり、採用活動は全体としてますます早期化しています。オンラインでの採用選考・説明会が定着する一方、対面での実施も増加しており、オンラインスキルと共に対人スキルも磨いておく必要があります。

キャリアセンターでも、このような就職活動の動きに対応するため、昨年3月、キャリアガイダンスを皮切りに、新規を含む様々な支援プログラムを開催しました。就職ガイダンス、個別相談等はオンラインでも実施し、実家や遠方にいる学生も参加することができました。

また、業界・企業理解を深めるために、昨年9月に約150社が参加した企業セミナー、今年2月に約300社が参加する学内企業説明会を対面で開催しました。学内企業説明会の内容の一部はオンデマンドでも配信しました。OB・OGに参加いただいた企業も約120社あり、後輩へのアドバイス等をいただきました。

就職活動中の学生を支援するため、今年6月中旬以降、必ず選考に参加できる企業採用選考会をオンラインで開催し、採用継続中の企業の求人情報を提供する等の支援を行っています。

現3年次生・大学院1年次生向けの就職支援について

就職活動の早期化・長期化、採用に直結したインターンシップが増えている現状に対応するため、キャリアガイダンスを1月下旬に実施しました。学業の優先を前提としつつ、就職活動への早期からの準備を促し、インターンシップ参加に向けてのエントリーシート・面接対策等のセミナーを実施、学生の積極的な挑戦を後押ししました。

また、学生の活動開始時期が多様化していることから、ガイダンス、セミナー、ワークショップ等を定期的に開催し、学生が就職活動をいつから始めても対応できるように、必要な知識やスキルが身に付く体系的なパッケージを用意しています。プログラムの多くをオンラインで開催し、キャリアセンターホームページ上でオンデマンド配信も行っており、いつでも視聴できるようになっています。

就職を取り巻く環境が変化していますが、就職環境の良し悪しにかかわらず、皆さんが企業にアピールすべきことは、主に、根拠に裏付けされた皆さんの強みと企業への熱意の2点です。また、皆さんが知っている大手企業や有名企業の多くは、就職環境に関係なく、常に「厳選採用」であることを覚えておいてください。大手企業や有名企業には、全国から何千、何万人もの学生からのエントリーがありますので、全員が面接選考までたどり着くことはできません。まずは、エントリーシートで自身をアピールすることが重要です。キャリアセンターで実施するエントリーシートセミナーに参加し、自分らしいエントリーシートの書き方を身に付けてください。

企業理解を深めるプログラムを今年度は9月から開催しており、9月には合計約100社、来年2月には約300社の企業を招聘する予定です。学外で開催される合同説明会と異なり、このプログラムは、同志社大学生だけのために多くの企業が参加いただける点が大きな魅力です。現時点で興味がある業界・企業だけではなく、幅広い業界を見て比較し、職業選択の幅をできるだけ広げてください。

特に、皆さんが知っている企業は、一般消費者向けのビジネスを展開するBtoCの企業が多いですが、日本には、企業向けのビジネスを展開するBtoBの企業が数多くあります。知らない企業でも、ぜひ積極的に情報収集をしてください。

キャリアセンターでは、皆さんからの個別の相談にも対応しています。相談という身構えてしまかもしれませんが、就職活動について話を聞いてほしい、考えを整理したいので誰かと話したいといった際に気軽に利用してください。多くの先輩たちも、就職活動の進め方や、エントリーシートの書き方等、様々な相談をしています。

就職活動では、一見すると明確な数値や基準のない中で採用・不採用が決まります。自信

をもって提出したエントリーシートや履歴書が通過しない時や、手ごたえがあった面接が不合格だった時は、自分自身を否定されたような気持ちになるかもしれません。落ち込んだ時は、一人で悩まずにキャリアセンターを大いに頼ってください。

企業の求める人材

経団連が実施したアンケート（「採用と大学改革への期待に関するアンケート結果」2022年1月18日）によると、企業が新卒採用時に期待する資質の1位は、「主体性」です。2位以下には、「チームワーク・リーダーシップ・協調性」、「実行力」が続きます。企業が新卒の学生に求める力は、「自ら主体的に行動し、周囲を巻き込みながら、実行する力」と集約できるでしょう。

オンラインによるコミュニケーションは、直接対面で話すのとは異なる難しさがあります。これまで以上に相手の意見を傾聴し、そのうえで自分の意見を伝えることが重要です。オンライン面接では、通信が途中で途切れてしまう、音声が届きづらい、カメラが機能しない等、様々な問題が起こり、面接の緊張感が加わって、対応に困った学生もいました。トラブルを未然に防ぎ、万が一トラブルが起こった時にも落ち着いて対応できるよう、事前にPC操作に習熟しておく等の準備をしておいてください。

また、リモートワークが増えたことで、職場で仕事をしている時よりも仕事の全体像が見えにくい状態にあります。指示を待つだけの受動的な姿勢では、業務に支障が生じることがあります。これからの社会人は、これまで以上に主体的に課題を発見して、対策を考え、解決に向け挑戦し、業務を遂行する力が求められます。

最後に

採用選考の過程では、学生時代に力を注いだエピソードを通じて、皆さんがどのような状況でどのように考え、どのように行動したのかが問われます。

大切なのは、何らかの目標を達成したという結果ではありません。目標を達成するまでにどのような努力をしたのかというプロセスを具体的かつ明確に伝えることが重要です。プロセスの中に、皆さんの強み、人間性、価値観、能力等が表れるからです。

「早めの準備と幅広い視点を持つ」「あきらめず粘り強く取り組む」「自分で考えて決める」の3点を意識しながら、自分を信じて前向きに就職活動に取り組んでください。

同志社校友会

Doshisha Alumni Association



INFORMATION

2

2025 November

同志社校友会は、1885年に「アルムニ会」として発足し、今年で創設140年を迎えます。主な目的は、卒業生の親睦と母校の発展への寄与であり、近年は大学との連携を通じた学生の支援にも力を入れています。現在、会員数は約38万人となり、国内外で多くの卒業生が活躍しておられます。



同志社校友会 会長 松岡 敬

TOPIC

コロナ禍において、経済的に困窮していた学生のため様々な支援を行ってきました。

2023年度になり、経済支援からコロナ前の栄養バランスの取れた食事への支援に戻し、補食として小鉢の提供をしました。

2024年度からは100円朝食の支援を通じて、規則正しく充実した学生生活を送ってもらえるよう支援をしています。

他にも奨学金の支給などを実施しています。

今後も学生に寄り添った支援を実施していく予定です。



同志社校友会 活動の概要

1 卒業生とつながる

2025年9月現在、国内に48の支部、海外に36の支部があり、校友会本部と連携しながら活動を行っています。

「地元へ戻りたい」「転勤により慣れない土地で生活するのが大変」「海外での勤務は家族も心配している」など、卒業生が抱える課題に対して、現地の支部がサポートをしています。



詳しくは
同志社校友会
ホームページへ



2 大学とつながる

同志社大学と連携し、学生へのサポート活動を行っています。同志社大学が掲げる「VISION 2025」の推進を目的としたリーダー育成やグローバル化事業推進などへの支援、その財源となる「同志社大学2025 ALL DOSHISHA募金」の活動支援、同志社フェアなどのイベントを通じた大学のプレゼンス向上のための活動を行っています。



3 学生を支える

「同志社校友会奨学金」「同志社スポーツ奨学金」、海外への留学支援として「グローバル人材育成奨学金」など給付型の奨学金を通じて学業と学生生活の充実がはかれるサポートを行っています。それ以外にも、学生生活のサポートとして食支援などに力を入れています。

同志社校友会本部事務局

TEL : 075-251-4393

E-mail : info00@doshisha-alumni.org

クリスマス・イルミネーション点灯式



2024年度の様子

アドベントを前に各地でクリスマス・イルミネーションが灯り始めるころ、同志社大学でも点灯式を催しています。

京都の冬の風物詩として広く親しまれている今出川校地の点灯式では、西門に入って北側に広がる彰栄館・同志社礼拝堂・良心館に囲まれたサンクタスコートのヒマラヤスギに

約16,000個のLED電球が灯ります。

京田辺校地では、3代目となる2019年に植えられたヒマラヤスギに約6,500個のLED電球が灯ります。正門を入ってすぐの同志社ローム記念館前にあるため学外からも望むことができ、キャンパスのシンボルとなっています。

今出川校地

11月20日(木) 17:15～(予定)
西門北側サンクタスコート ヒマラヤスギ周辺

京田辺校地

12月1日(月) 16:45～(予定)
同志社ローム記念館前

※都合により、変更になる場合があります。

第150回 同志社EVE「さぁ150しよう」

同志社EVEは、11月29日の同志社創立記念日を祝うための記念行事です。

2025年度は11月26日(水)から28日(金)までの3日間、今出川校地にて開催します。

本年度の同志社EVEは、同志社大学が創立150周年を迎える節目の年にあたり、これまで築き上げられてきた歴史を振り返るとともに、未来へとつながるEVEにしていきたいと考えています。昨年度から本学が所在する上京区を中心とした「地域」とのつながりを深めることに力を入れており、本年度も大学・学生・地域が一体となってこの一大行事を作り上げていきます。

本年度のテーマは「さぁ150(ヒャクゴジュウ)しよう」です。

これは、第150回を迎える同志社EVEがこれまでの歩みを継承しつつ、学生が一丸となって作り上げる催しであることを示す「合言葉」として掲げました。

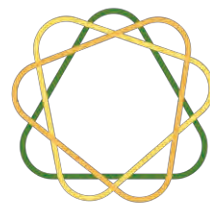
ここでいう「150」には、次のような想いを込めています。

- ・150年の歴史を振り返る … 創立以来の歩みを再確認し、次世代へつなぐ節目とする。
- ・150の挑戦を始める … 小さな一歩でも、新しいことに挑戦する契機とする。
- ・150の出会いをつくる … EVEに参加した人それぞれが新しいつながりを見つける場とする。

同志社EVEに関わるすべての人が前向きに挑戦し、新しい出会いを見つけ、未来へ踏み出す契機となることを期待しています。

当日は、例年のようなステージでの演舞や屋内外出店に加え、学生団体の活動や京都の伝統工芸を体験できる企画をレベルアップし、多彩なプログラムを通じて、世代や立場を超えた交流の場を創出いたします。

伝統を受け継ぎ未来を拓く同志社EVE(今出川校地)に、ぜひご来場ください。



DOSHISHA EVE150th
～さぁ150しよう～



第150回
同志社EVE公式HP
<https://doshisha-eve.com/>





「ゼミで学ぶ 魅力を語る」

幅広い領域の専攻から数多くのゼミがある本学。

それぞれ、どんなことを学んでいるのか。

ゼミ教員が、個性豊かなゼミの魅力を語ります。

政治経済学を学ぶ普通のゼミ



経済学部
教授

おおの たかし
大野 隆 ゼミ

Ohno Takashi

ゼミでは「政治経済学」をテーマに、マルクス経済学の視点から現代資本主義の諸問題を深く探究します。不平等や長期停滞といった課題を論理的・数学的に厳密に分析し、卒業論文としてまとめます。

普通のゼミですが、あえて特徴をあげるとすれば、繰り返し論文執筆に取り組むことにあります。

2・3年次から、何度も「正解のない問い」に挑戦することで、粘り強く考え抜く「知的体力」が養われます。この経験が、学生の卒業論文の質を非常に高いものにするのと同時に、あらゆる課題の本質を見抜く「深く考える力」を育みます。

私自身、このようなゼミも、未だ捨てたものではないと考えます。

政治経済学を通じて社会の課題を考えることは、自然と望ましい社会のあり方を考えることにつながり、ひいては自分自身の価値観を知るきっかけとなります。ゼミでは、学問的な研究手法を応用した

自己理解ワークショップも開催します。「深く考える」ことを応用して自己理解の方法を会得するとともに、社会課題と向き合うことで、自分が何にこだわり、どう生きたいのかを知る機会となる。これこそが、ゼミで真摯に学問と向き合うことに対する「ご褒美」です。

昨今の風潮に抗い、就職に直接役立つゼミではありません。しかし、学びに真摯に向き合う真面目なゼミ生たちが、ゼミでの学びを通して、自らの幸せが何なのかを知り、その実現のために主体的に行動し、未来を切り開いてくれると信じています。

企業家との連携をつうじた日本の中小企業・アントレプレナーシップの研究



商学部
教授

せき ともひろ
関 智宏 ゼミ

Seki Tomohiro

企業の大多数を占める日本の中小企業は、経済社会で重要な役割を果たしています。中小企業が今後も存在し続けていくためには、いかに環境が変化したとしても、事業活動を果敢に持続させていくアントレプレナーシップが発揮されなければなりません。

企業との連携をつうじた日本の中小企業・アントレプレナーシップの研究

本演習（2・4年次）では、日本の中小企業家（経営者）と直接かわりながら、中小企業（家）の役割や直面する経営上の諸課題の考察から、中小企業がさらに質的に発展していくアントレプレナーシップを理解するための諸活動をおこないます。具体的には、2・3年次演習では、さまざまな中小企業などの経営者団体と連携しながら、中小企業家を大学にお招きしご講演いただいたり、複数の企業家とのグループディスカッションや企業への直接的な訪問をおこなったりします。また、東南アジアなど海外で活躍さ

れている中小企業家とも対話し、国際社会の見地から中小企業経営について考察もおこないます。4年次演習では、これらの成果を卒論としてとりまとめます。

中小企業のことを深く知り学ぶためには、中小企業家から真なる情報を発語として得る必要があります。そのためには中小企業家との豊かな関係性が必要になります。7期生ゼミ長の庄林夏希さんは、「さまざまな価値観やバックグラウンドを持つ人が多いゼミですが、1人ひとりの個性を大切にし、お互いを尊重し合えるゼミで…機会をつかんで成長できる」と言ってくれています。このように本演習では、豊かな人間関係の形成を目的とし、個性あるメンバーはもちろん、中小企業家などとの間の関係形成に寄与する活動をおこなうとともに、個々人がさらに成長していく機会につながります。

Seminars

learning objects of

子どもの心の健康を支える



心理学部
教授

いしかわ しんいち
石川 信一 ゼミ

Ishikawa Shin-ichi

私のゼミでは、子どもの心の健康を守り育てる研究を行っています。対象は小・中・高校生で、心理的な問題が起こる前の予防や、今実際に困っている子どもたちへの支援を中心に活動しています。

ゼミの特徴の一つ目は、縦のつながりです。大学院生が多く在籍しているので、新しくゼミに加わった3年次生は、上級生との顔合わせに参加して、研究プロジェクトの紹介を受けます。学部生の中には臨床心理士や公認心理師を目指す人もおり、学年を超えた交流が研究室の活性化につながっています。

二つ目の特徴は、横のつながりです。卒業論文では実際に小中高校に向いて行う実践研究が多くあります。学校での研究は一人ではできません。仲間と一緒に模擬授業や教材づくり、授業観察の練習を行うなど、チームワークが欠かせません。教育現場では予想外のことも起こりますが、それらに柔軟に対応

しながら、私自身も学生と共に成長していきたいと考えています。

ゼミ生の声

(河端紗瑛子さん、黒川朋香さん、
酒木陽妃さん、吉田真瑠さん)

私たちは中学校での実践を通して、子どもの心の健康に関する研究を行っています。学部生のうちから実際の学校現場に関わる貴重な機会を得て、ゼミでは学生同士で学び合い、主体性や協調性を高めることができます。



授業準備の様子

自然言語処理で充実した研究室生活を



理工学部
准教授

たむら あきひろ
田村 晃裕 ゼミ

Tamura Akihiro

私は、音声処理が専門の加藤恒夫先生とともに、音声言語処理機構研究室を主宰しています。私の専門分野は機械学習による自然言語処理であり、この分野の研究に取り組む学生の研究指導を行っています。自然言語処理とは、私たちが普段使っている日本語や英語などの言葉やテキストを、コンピュータで解析したり処理したりする技術です。例えば、コンピュータで自動的に翻訳を行う機械翻訳、文章を自動的に要約する自動要約や、近年注目を集めるChatGPTなどの生成AIを支える大規模言語モデルなどです。

研究指導においては、情報技術の基礎知識や自然言語処理の専門知識を身につけてもらうだけでなく、社会に出てからも役立つコンピテンシーとして、主体的に問題解決できる力を伸ばせるように心がけています。そのために、研究テーマは学生の趣味や興味、希望にあわせて設定しています。また、言われたこ

とだけをこなす作業者にならないよう、細かく指示を出しすぎないよう意識しています。失敗を恐れず、主体的・積極的に様々なことに挑戦して、充実した研究室生活を送ってほしいと思っています。

ゼミ生の声

先生や先輩方の温かいサポートのもと、各自が関心のあるテーマに自由に挑戦できるのがこのゼミの魅力です。ゼミには感情分析や詐欺検出など多様な研究テーマに挑戦する仲間もいます。互いに議論し刺激を受けながら、研究を深められる環境が整っています。



－ 2025年度 －
卒業式・学位授与式 (学部・大学院)

日時	学部・研究科	場所
3月20日 (金・祝)	10:00 文学部・文学研究科	栄光館 ※1
	12:30 法学部・法学研究科	
	15:00 神学部・神学研究科、政策学部・総合政策科学研究科、司法研究科、ビジネス研究科	
3月21日 (土)	10:00 経済学部・経済学研究科	京田辺校地 デイヴィス 記念館 ※2
	12:30 社会学部・社会学研究科、グローバル地域文化学部、国際教育インスティテュート、グローバル・スタディーズ研究科	
	15:00 商学部・商学研究科	
3月22日 (日)	10:00 理工学部・理工学研究科	京田辺校地 デイヴィス 記念館
	14:00 文化情報学部・文化情報学研究科、生命医科学部・生命医科学研究科、スポーツ健康科学部・スポーツ健康科学研究科、心理学部・心理学研究科、グローバル・コミュニケーション学部、脳科学研究科	

※1 栄光館での出席は卒業生・修了生のみとし、ご家族等は中継会場(寒梅館ハーディーホール)にて出席いただきます。
※2 入学式会場への来場は、新入生本人のみに限らせていただきます。

－ 2026年度 －
入学式 (学部・大学院)

日時	学部・研究科	場所
4月1日 (水)	9:30 商学部・商学研究科、文化情報学部・文化情報学研究科、理工学部・理工学研究科、グローバル・スタディーズ研究科、司法研究科	京田辺校地 デイヴィス 記念館 ※2
	12:30 文学部・文学研究科、社会学部・社会学研究科、法学部・法学研究科、スポーツ健康科学部・スポーツ健康科学研究科	
	15:30 神学部・神学研究科、経済学部・経済学研究科、政策学部・総合政策科学研究科、生命医科学部・生命医科学研究科、心理学部・心理学研究科、グローバル・コミュニケーション学部、グローバル地域文化学部、国際教育インスティテュート、脳科学研究科、ビジネス研究科	

1インチの攻防 下

倉科一希 立石洋子 他訳 岩波書店
4,180円

アメリカの未解決問題

三牧聖子 他著 集英社 1,045円

刑務所に回復共同体をつくる

毛利真弓 著 青土社 2,860円

辺境のラッパーたち

中野幸男 他著 青土社 3,960円

映像アーカイブ・スタディーズ

河原大輔 他訳 法政大学出版局
5,830円

ノンフォーマル教育の可能性

増補改訂版

見原礼子 他著 新評論 3,300円

芸術と社会

竹内幸絵 他編著 森話社 4,950円

日本の植民地支配

板垣竜太 他著 岩波書店 627円

スマート・ベニューハンドブック

庄子博人 他執筆協力
ダイヤモンド・ビジネス企画 2,200円

図録 行政法

中尾祐人 他著 弘文堂 2,970円

法学教育の四半世紀

川嶋四郎 著 日本評論社 9,570円

Handbook of Japan's Foreign and Domestic Policies During the Decade of Abe

大崎祐馬 他著 Japan Documents

比較政治学事典

浅羽祐樹 飯田健 宇佐見耕一
森下明子 吉田徹 他著 丸善出版
28,600円

オックスフォードと英文学

臼井雅美 編
金津和美 金谷益道 臼井雅美 他著
英宝社 3,740円

国際平和論

三牧聖子 他著 有斐閣 2,750円

基本刑法Ⅱ 各論 第4版

十河太朗 他著 日本評論社 3,740円

労働契約法 第3版

土田道夫 著 有斐閣 9,350円

これからの福祉政策

畑本裕介 他著 有斐閣 2,200円

拡大する情報空間と放送メディアの未来

河島伸子 他著 勁草書房 3,850円

感情心理学・入門 改訂版

余語真夫 他著 有斐閣 2,090円

電気電子系学生のための英語処方 改訂版

馬場吉弘 著 電気学会 2,970円

図書館を学問する

佐藤翔 著 青弓社 2,640円

EU百科事典

太下義之 河島伸子 吉田徹
鷺江義勝 他著 丸善出版 24,200円

若者たちが学び育つ場所

見原礼子 他著 ナカニシヤ出版
3,630円

優生保護法のグローバル史

小野直子 他著 人文書院 3,960円

1インチの攻防 上

倉科一希 立石洋子 他訳 岩波書店
4,180円

韓国とつながる

浅羽祐樹 編 浅羽祐樹 朴鍾厚 他著
有斐閣 2,640円

西洋中世文化事典

大沼由布 他編著
阿部俊大 石田隆太 他著 丸善出版
26,400円

経営者報酬の理論と実証

澤田雄介 他著 中央経済社 4,730円

新版 人材開発辞典

瓜生原葉子 太田肇 田中秀樹
藤本昌代 他著
東洋経済新報社 13,200円

保健医療と福祉 第2版

野村裕美 他著 中央法規出版
2,970円

比較のなかの韓国政治

浅羽祐樹 著 有斐閣 2,860円

債権法改正講座 第3巻 契約

大中有信 他著 日本評論社
5,500円

公教育における運営と統制の実証分析

田中宏樹 著 勁草書房 4,400円

The Multiverse as Theory in Postmodern Speculative Fictional Narratives

阿部康人 他著 Routledge

障害者福祉 第2版

廣野俊輔 他著 中央法規出版
2,970円

刑事司法と福祉 第2版

毛利真弓 他著 中央法規出版
2,970円

本学教員の 執筆図書紹介

(価格は税込み)

室町九州の紛争・秩序・外交

山田徹 他著 戎光祥出版 9,900円

日本外交の近代史

森靖夫 他著 東京大学出版会
6,490円

新 入門・日本経済

野間敏克 他著 有斐閣 3,190円

面白くて刺激的な論文のためのリサーチ・クエスションの作り方と育て方 第2版

佐藤郁哉 訳 白桃書房 3,000円

国際刑事裁判所 第3版

新井京 他著 東信堂 4,620円

女の子のための

西洋哲学入門

鬼頭葉子 他訳 フィルムアート社
3,630円

同志社人

訪問



マテリアルハンドリング分野で世界トップのシェアを誇る株式会社ダイフクの代表取締役社長、下代博さんは経済学部経済学科の卒業生です。55年前、1970年に開催された大阪万博で国産初の無人搬送車を走らせ、脚光を浴びたダイフク。その舵取り役を担う下代さんに、当時より受け継がれてきたものを「レガシー」としてどう生かしているのか、そして無人化への想い、未来のビジョン、学生時代の思い出までを、後輩にあたる経済学部経済学科3年次生の宇佐美然士さんが伺いました。

「無人化」の原点「プロントウ」

宇佐美…正直に言うともテリアルハンドリングという言葉がこれまで聞いたことがありませんでした。Webサイトを拝見して、世界トップシェアの企業だと分かったのですが、具体的にどのような会社なのか教えてください。

下代…簡単に言えば「モノを動かす」技術で物流や生産の現場を支えている会社です。工場内での自動車のボディや半導体ウエハの搬送から、ECサイトの物流センター、空港の手荷物



Interviewer

経済学部経済学科 3年次生

宇佐美 然士さん

愛知県出身。ゼミでは政治経済学を学び、上層部と現場の認識のズレが組織にもたらすエラーを研究している。就職活動では、型にはまらず一人ひとりの考えを大切にする企業を志望し、人に影響を与える仕事を通じて社会に貢献したいと考えている。経済学の面白いところは「実生活で体験してきたことが理論で説明できる瞬間」。



今回の同志社人

株式会社ダイフク 代表取締役社長

下代 博さん

1983年同志社大学経済学部経済学科卒業後、株式会社ダイフク（当時・大福機工株式会社）に入社。営業部門でキャリアを積み、自動倉庫や物流システムを手掛ける現在のイントラロジスティクス事業を牽引。2018年に代表取締役社長に就任し、マテリアルハンドリング分野におけるグローバルリーダーとして経営を担う。19年、財界「経営者賞」を受賞。

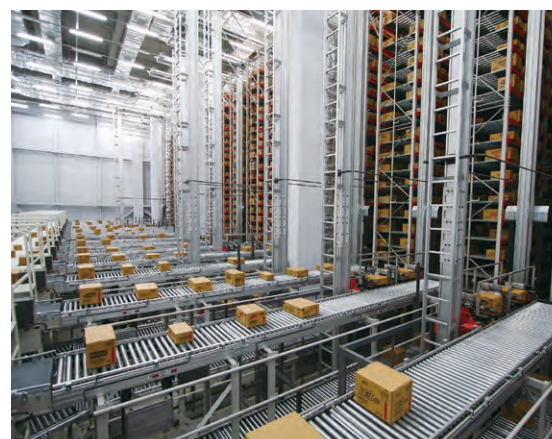
搬送まで、人の目に触れない「裏方」の自動化システムを手がけています。君たちがインターネットで注文した商品が翌日届くのも、私たちの技術があつてこそなんです。

宇佐美…1970年の大阪万博で話題になった製品があると伺いました。

下代…「プロントウ」という無人搬送車ですね。道路に埋め込んだ誘導線の信号に沿って自動で走行し、万博会場のごみ回収を担いました。

宇佐美…今から半世紀以上も昔に、無人の車が走っていたなんて驚きです。

下代…フォークリフトやコンベヤのような荷役機械はすでにありましたが、1970年代に無人で動くものはほとんどなかったと思います。運搬作業の無人化は、特に人を重労働から解放する、という想いが根底に流れています。マテリアルハンドリング分野は、まさにその想いを形にする技術によって発展してきたのです。



EC時代を支える倉庫内物流の自動化システム。
保管・搬送・仕分けからソフトウェアまでを手掛ける、イントラロジスティクス事業はダイフクの主要事業の1つ

たのです。

宇佐美…「プロントウ」に込めた無人化への想いは「レガシー」として現在どのように受け継がれているのでしょうか。

下代…私たちの事業の根幹として、しっかりと受け継いでいます。例えば、物流センターでは自動で保管・搬送するシステムや仕分けシステムが導入され、大規模な物量にも対応できるようになりました。こうした工場や物流センター内の保管・搬送・仕分けを最適化する「イントラロジスティクス」の領域は私たちの得意分野です。それ以外にも、最先端半導体の生産に欠かせない半導体工場内の天井搬送システムなども提供しています。

宇佐美…半世紀前の技術に込められた想いが成長して、社会のさまざまなインフラを支える大きな柱となっているんですね。

完全な無人化の時代が来たとき 求められる人材像とは

宇佐美…技術が進化し続ければ無人化が加速しますよね。社会のあらゆる場面に広がったとして、人の役割はどのように変わっていくのでしょうか。

下代…単純作業ではない、判断や工夫が必要な仕事を担うことになるでしょう。創造性や判断力、柔軟な発想力がより大切になりますね。

宇佐美…そうした力を培うには、どのような経験を積むと良いのでしょうか。

下代…新しいことに挑戦してください。これからの社会では、答えがすぐに見つからない課題が増えます。そこに自分なりの工夫で向き合った経験が力になるはずです。

宇佐美…下代社長ご自身は、学生時代どのような経験を積まれたのでしょうか。同じ経済学部経済学科の後輩として、ぜひ聞きたいです。

下代…私は、計量経済学のゼミで計量モデルの研究をしていました。今と違って厚紙に穴を開けて情報を記録するパンチカードを使った計算だったので、データ処理

が本当に大変でした（笑）。ですが、数字やデータを基に日本や世界の経済を予測する中で、「論理的に考えて先を見通す」という思考法が身につきました。

これは今も大きな財産です。

宇佐美…私も今まさに、理論や数字を通じて将来のあるべき社会像について考



1965年に製造・販売を開始した日本初の無人搬送車「プロントウ」。現在のAGV（無人搬送車）の先駆的存在として、70年の大阪万博で脚光を浴びた



下代…確かに技術畑の出身者が多い中では珍しいかもしれませんね。ただ私は、営業でも技術でも出発点は関係ないと考えています。専門知識は後から学べます。大切なのは「自分はどんな形で社会に貢献したいか」という意識を持つことです。

宇佐美…「社会に貢献する意識」がキャリアの原点にあるんですね。

下代…そうだと思います。就職活動の際、当時のダイフクで「ロボットがロボットを作る」工場のシステムを見て、衝撃を受けました。その瞬間、「この会社なら新しい価値を生み出し、社会を根本から便利にする仕組みを作り出せる」。そう確信したのが入社を決めた手でした。そして経営者となった今は、経済価値と社会価値を統合し、「究極の無人化」を目指しています。そしてそれは、持続可能な社会の実現に貢献することだと思っています。

宇佐美…「究極の無人化」とは、どんな姿でしょうか。

下代…人が重労働や危険な作業から完全に解放され、安心して創造的な仕事に専念できる社会です。ただし、効率化だけでなく、気候変動への対応や生物多様性などを通じた環境課題への取り組みも同時に追求していくことが大切だと考えています。

「レガシー」は、持続可能な社会への 貢献として継承へ

宇佐美…下代社長は営業からスタートし、代表取締役社長に就任されました。メーカーの経営者には技術畑の方が多い印象を持っていたので、下代社長が歩まれたキャリアに関心があります。



上／結いの森(滋賀事業所)は2014年に整備された敷地内ビオトープ。24年環境省「自然共生サイト」認定
下／2013年に稼働した太陽光発電システム「ダイフク滋賀メガソーラー」。発電容量は4.4メガワット

宇佐美…経済とサステナビリティの両立ですね。ダイフクでは、どんな取り組みをされていますか。

下代…弊社では事業活動が自然資本に与える負の影響をゼロにすることを掲げており、マザー工場である滋賀事業所の使用電力を再生可能エネルギーで100%まかなっています。また、生物多様性を守りながら工場エリアを運営しており、希少種を含む動植物が生息できる環境を維持して、産業と自然の共存を実現したいと考えています。

宇佐美…今日のお話を通じて、ダイフクには「無人化」から始まる多くの挑戦の積み重ねが「レガシー」として息づいていると感じました。このレガシーをどのように次の世代へ引き継いでいきますか。

下代…私は無人化という言葉以上に、人を重労働から解放し、社会に役立つ仕組みをつくるという思想を残していきたいです。効率化を追求するだけでなく、モノを動かす技術を通じて社会に貢献し、人々の心に寄り添う存在であり続けたい。それが、ダイフクの目指すこれからです。

取材を終えて

Interviewer

宇佐美 然士さん



今回のインタビューで心に残ったのは、「人を重労働や単純作業から解放したい」という下代さんのお話です。単純作業はロボットに任せ、人は判断や工夫が必要な仕事を担うことを大切に考える方はとても興味深かったです。また物流のすべてが自動化される未来を思い描く姿に驚き、同時にわくわくしました。私も未来を難しく考えすぎず、希望や可能性を信じて少しずつ行動していきたいと感じました。

挑戦する人 My Purpose

かじもと いちか
梶本 一花さん
スポーツ健康科学部
4年次生

大阪府出身。母親のマトニティースイミングをきっかけに水泳を始める。第101回日本学生選手権水泳競技大会では自由形の400m、800mで二冠を達成。第79回国民スポーツ大会のOWS女子5km優勝。

インタビュー動画もチェック



日本勢も、 長距離種目で戦える！

まだ日も昇りきらない京田辺キャンパスのプールに、水を切る音が響

く。インカレを間近に控えたこの日は、フォームの一つひとつを確認するように、入念な調整を行っていた。梶本さんには2つのステージがある。プールでの「競泳」、そして、自然の海や湖、川などで行われる

「オープンウォータースイミング(OWS)」だ。世界水泳での優勝など、国内外で活躍する梶本さんだが、世界の舞台を目指したのは意外にも、大学生になってからだ。生後4カ月からベビースイミ

ングを習い、本格的に競泳を始めたのは小学生の頃。持久力に自信があったといい、当時から「長距離の方が向いている」とコーチにも言われていたそう。そんな経緯もあり、中学3年生の時に初めてOWS女子5kmに出場した。しかし、梶本さんにとっては、海に入ること自体が初めての経験だった。「その時はとにかく海が怖くて、『早く終われ!』と思いながら泳ぎました(笑)。結果は完泳で精一杯だったんですが、達成感は強く残りました」

く応援してくださいる人たちがたくさんで、安心して頑張れるんです。ハードな練習が良い結果につながったり、国内外の大会で友だちができたり。水泳を楽しむ理由が増えるにつれて、メンタル面も強くなったように思います。支えてくださる人やライバルのおかげで、今はとても充実した競技生活を送れています。目下の目標は、競泳とOWSの二刀流で2028年のロサンゼルスオリンピックに出場することだが、その先にはさらに大きな夢がある。

「日本人は長距離種目で戦えないというイメージもまだまだあると思うので、もっと活躍して盛り上げていきたいです。私が競泳を頑張ることで、OWSについてももっと知ってもらえたら嬉しいですね」

二刀流の オリンピックを目指して



それ以降もコンスタントに大会へ出場し、大学1年生の夏、世界ジュニア選手権の日本代表に初選出された。10kmを泳ぐために鍛え上げた泳力は、競泳の記録向上にもつながり、今年の日本選手権では自由形の400m、800m、1500mで三冠を達成。競泳とOWSの2種目の日本代表として臨んだ世界選手権では、3kmノックアウトスプリントで優勝、5kmでも3位に入るなど、日本勢初の快挙を成し遂げた。

多くの記録を持つ梶本さんだが、プレッシャーは感じていない。「良い結果でもそうでなくても、温か



↑ 2歳の頃からプールに親しんでいた梶本さん。ベビースイミングでの貴重な一枚